

新型コロナ禍、複合災害に向け 安全・安心な「在宅避難」を目指しましょう！

2020年12月5日
副会長 江尻 哲二

今年は、新型コロナの感染拡大が続く中、幸い大きな地震災害はありませんが、7月には九州を中心に豪雨が襲いました。地震大国日本は、何時起きてもおかしくない地震大国です。

避難所は3密を満たしやすい傾向であり、その対応で収容人数は半減以下に。そのため政府は在宅、知人友人宅、ホテルなど任意の場所への避難(分散避難)を奨励しています。

災害時でも、冷暖房設備も完備されておらず、精々ブルーシートで持参のものにくるまって寝る程度で、プライバシーも満足にとれず、トイレも少ない状態の避難所で過酷な避難生活を送らずに、自宅で生活していく在宅避難を基本に備えてほしいと思います。

それには、下記5つを守って避難生活を乗り切ることを考えて欲しいです。

1. **建物と室内の安全確保**：建物が安全で、室内で崩れるものから身を守れる、火災を出さない家屋が前提です。
2. **食料・水・燃料などの備蓄**：大災害時には、ガス・水道・電気などライフラインも寸断される可能性も高くなります。またライフラインが復旧しても、店の再開には時間が掛かります。10日程度の食料品・水・カセットボンベの在庫、非常時用トイレなどの準備を。
3. **情報の確保**：正確な被害・生活情報の確保を。ご近所との情報交換、テレビ・ラジオ・SNS・横浜市防災メールサービス・自治会や避難時の掲示など
4. **健康管理**：持病や障害のある方は、日頃から主治医と相談、薬の備えなど
5. **自宅以外での避難の場合には、必ず班長など自治会に居場所の連絡**：7月豪雨での熊本では車中泊、ホテルなど任意避難が増加し、その調査・支援の提供に相当苦労され、また避難者にとっても、情報なし、支援なしの状態が続いたと聞いております。
3年前の熊本地震時には、在宅避難も含めた避難所以外での避難で、目が届きにくく、体調を崩しても発見が遅れる場合があり、震災関連死の8割を締めるという結果となっています。

以上